

# 輪姦 潜入 教員

～壊れた学園～

089  
タロー

表紙イラスト：みかん。



試し読み版

二次元ぷち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『輪姦潜入教員 ～壊れた学園～』  
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



潜輪  
入教員  
女

089タロ一  
表紙／みかん。

## 登場人物紹介

Characters

---

さくらば さなえ

**桜庭早苗**

正義感に燃える潜入捜査員。黒髪の美しいFカップの美女。

すぎわら みさと

**杉原美里**

早苗と同じく潜入捜査員。ボブカットの明るい女性。

そこは——まるで、異臭のような空気の漂う空間だった。

もちろん、実際に何が臭うわけでもない。絵としては、綺麗に磨かれた床や壁、高級感のある扉や金のかかった証明器具という、見目美しい屋内である。

しかし——それでも捜査員としての嗅覚には何か臭って仕方ない。そんな場であった。「君たち！ もう授業は始まるわよ。早く教室に戻りなさい！」

よく通るソプラノで叱責したのは、紺のスーツにタイトスカートといういでたちの、一人の女性だった。

ぱっちりとした瞳はやや吊り気味。ふっくらとした唇は薄いルーージュで彩られ、まだ少女から大人へと変貌したてという印象がある。空気を孕んだふんわりストレートのボブカットも、どちらかと言うと大学生風に見えなくもない。

体格もほっそりしており華奢な印象。だが、細さが強調する胸と腰の膨らみ具合が、確かな成人女性の色香を香らせていた。

大きめのバストにパンと張りのあるヒップ。スーツを押し上げるそれらは、部分痩せに大成功したモデルのような印象である。額中央で分けられ目尻を隠しつつ顎まで伸びた前髪も、どこか格好のよい色気となっていた。

「はあ？ 何言ってるんだ、アンタ？」

数人の男子が、意表を突かれたように眉根を歪める。

青いブレザー姿の、見間違えようもないほど学生の服装。そんな彼らは、しかし叱責など心外だとはかりな態度だ。言葉も、年長者や正論に対するそれではない。

一見、どこかの学園の不良生徒を叱る教師といった場面。しかし、その少年たちは、決して不良らしい様には見えない。休み時間であれば、微笑ましい光景にすら映る集いだった。それでも、彼らは注意に対して睨みで返している。まるで不当な叱責を受けたかのように。納得いかないと言いたげに。

「聞こえなかったの？ もう授業の時間なのよ。戻りなさい！」

スーツ姿の女性がさらに怒鳴る。すると気圧されたのか、これ見よがしに舌打ちなどしながら、男子生徒は教室へと戻っていく。やはり、決して無茶な不良生徒という印象ではない。

とりあえず、すんなりと指導できたかのような場面。だが、その女——早苗は、苦いため息を隠せなかった。

「まったく。どうなってるの、この学園は？」

「そう気張っては駄目よ早苗。わたしたちの任務を忘れてないで」

苦笑を張りつかせて耳打ちしてきたのは、穏やかな相貌の長髪の女性だった。隣合わせの席から椅子を滑らせて近寄ってくる。

艶めく黒髪を綺麗に切り揃えた、大人の落ち着きを纏った美女である。Cカップくらい

の適度な胸に、張りよりも優しさを匂わすふくよかな腰といった、均整の取れた美しい体型の持ち主。

優しいお姉さんといった印象の同僚——二つの意味で——に、彼女は振り向いて応じた。「分かつてるわ杉原さん。でも、教師らしいこともしないと」

唇を歪ませてボブカットの女性、早苗。どこか納得いかない態度である。

「まあね。でも、わたしたちは実際に教員じゃないのよ。あくまで仮の姿なんだから」  
そう釘を刺されて、彼女——桜庭早苗は押し黙った。

美女——杉原美里の言うとおり、彼女たちは、正式な教師ではない。その本職は官憲——捜査官である。

早苗と杉原は、この学園に潜入しているのだ。臨時講師という名目で。

目的は、この学園で多発している失踪事件の捜査である。近年、ここでは不思議なくらいに教師——特に女教師が、原因不明の失踪をしてしまう事件が起こっているのだ。

閉鎖的な学園という空間。そこに官憲の立ち入る余地は少なく、結果的に、やむなく潜入捜査という方策が取られたというわけだ。

「でも……この異常な学園は何？ あんなに生徒が我が物顔だなんて」

先のような注意。それは一度や二度ではない。今日一日だけでも、すでに数十回もの叱責を繰り返していた。

思わず声が震えてしまう。対犯罪者としての勘が警報を鳴らして仕方ない。いくら強くとも、一人では複数を相手にできないのが人間。二人に掴まれて二人目に撃たれば所詮それまでなのだ。そしてここには、最低でも十人は男がいる。開け放した扉が背後で閉まる。途端に辺りは暗さを増した。見え辛い中で、さらに二人ほどの男に掴まれてしまう。

「いやっ！ は、放しなさいっ!!」

「うるせえよ。思いつきり投げ飛ばしてくれたなあ、痛かったぜえ？」

「礼はさせてもらわねえとな」

どうやら先に指導した腰巾着の生徒らしい。彼らはまだまだ雄欲に溢れており、無遠慮に胸元を掴むと、躊躇いも手加減もなく引き裂いてきた。

「ピリィィィッ!! プチプチッ！」

「きゃあああっつ!! や、やめてえっ!!」

悲鳴が喉を枯らす。恐怖と羞恥に胸が振れる。振り解くような動きは、彼女の胸を大きく揺すった。

ブルン！ ユサユサっ。と淫靡に跳ねる二つの柔肉。白いブラウスが盛大に破り取られ、ボタンが飛ぶ。開いたスーツの間からは、悩ましい谷間が覗かれる。

「うほっ、細いクセにいい乳してんな。さっきの女より色っぽいぜ」

「くうっ!?　こんな、こんなことっつ!!」

盛大に破られた胸元を隠すために必死に身を傾ける早苗。もちろんブラは着けていたが、白い包みはフロントから壊されてパカパカと浮いてしまっていた。後は開くだけで、容易に生乳房が見られてしまうだろう。

だが、後ろ手に拘束されてはどのにもならなく、前傾した胸を容赦なく揉みこまれてしまう。ギユッ、ギユッ、と白ブラの上から二人の掌で。

「あううっ!　この、触らないでっ!」

ゴツゴツした指が乙女肉に食いこみ、柔らかな膨らみを楽しまれてしまう。

普段隠された女体の起伏。それは驚くほどふくよかな丸みだった。ほっそりしつつもつべき脂肪はついている、そんな肢体が早苗の正体である。

八十七センチという胸囲にFカップという、細さと豊かさを交えた甘い肉球。それが左右から二人組に押し掴まれる。

キュッ。もにゅっ。もみっ、もみっ。

「あうっつっ!　いやっ、ダメっつ!!」

「おお、柔らかい。ブラ越してもメチャ気持ちいいぜ」

「こいつぁいいぜ。もつと早くヤっちゃまうべきだったな」

（くうっ!　こんな　相手にいっ!）

恥感に思わず身が振れてしまう。両腕を掴まれたままクネクネと。

その情けなさと、胸肉を伝うゾクリとした感覚に嫌悪して、何とか腕を放そうともがく。肩が強張り、掴まれた腕がギチギチと唸る。

「はは、ムダムダ。そのオッサン身体鍛えてるからなあ。アンタの力じゃ外せないぜ？」  
「くうっ！」

「しかし……いつまでも暴れられるのも困るな、桜庭君」

冷たい声音は理事長のものだった。そして、器用に片手だけで早苗の両手首を掴むと、前傾した彼女の尻めがけて――

「パアアン！ パアアン！」

「あああっ!! ぐううっ!!」

力一杯張りつけてきたのだ。これには早苗も驚きを隠せない。

「いつ、痛いっ！ 何を……っ!!」

「聞き分けのない者には、折檻が必要だということだ。教育上の必要悪だよ」

筋違いなことを平然と言つてのける崩学院。そこには少年のような昂ぶりもなければ、支配者のような傲慢さもない。冷徹な教育者といった様相で早苗を見下ろしていた。

「な、何をふざけたこと……ああっ!!」

「パアアン！ とさらに打ち下ろされる平手。まるで手加減のない張り手に、灼熱のよう

な痛みが駆け抜ける。痛みに身体が硬直させられる。

「くうっ、い、痛……！」

「ははは、いい気味だな新人さんよ。おとなしく触らせろっての」

まるで相手への折檻である。この歳になってこんな目に合うとは思わなかった。しかも、いわれのない体罰など。

（いつ、イヤ！ オシリまで揉まれて……！）

硬直したところで、さらに女体が弄られていく。乳房がグイグイと押されるように揉みこまれ、汚らわしい掌熱が浸透させられる。ブラがずれるたびに乳粒がこすれ、感覚が敏感になっていく。

ねちっこく痴漢されるスレンダーグラマー。痛みと恥じらいに細腰がもがき、パツパツな感じの胸が、尻が、こね回されて柔らかみを増していくのが分かった。

「すげえな。掌に納まりきらねえ。センチはねえけどカップはあるぞコイツ」

「へへ、ケツもムチムチで堪んねえ」

少年たちの欲望は、ますます盛っていくようだった。擦り寄るように密着すると、左右から押しこむように乳房と尻肉を寄せてくる。そしてタプッ、タプッ、といやらしく上下に揺さぶってくるのだ。

豊かな乳房が恥ずかしく揺らされ、張尻は誘うようにキュッと震わされる。

「いやあつ！ やめて、これ以上罪を……あうっ!!」

皆までは言えない輪姦教師。男子の舌に、首筋を左右から舐められたのだ。

ベロベロ、じゅる、と縦に舐められ、ゾクリとした恥感に苛まれる。生暖かい唾液に耳元や髪まで塗らされて、確実に汚れていくのが分かってしまう。

「くうう、やめ、離してっ！ くああつ!!」

侵食される悪寒に堪えきれず身を振る。が、すかさず容赦ない体罰がタイトスカートのヒップを打ちのめした。

パシイン！ パシイン！ パアアン！

「あううっ!! あはあつ!!」

「まだ教育が足りないようだな桜庭君？ そんなことでは、当学園の教師は務まらんよ」  
両手を掴んでいる理事長が、冷酷に言う。片手だけで掴んでいるというのに、まったく疲れを見せない。後ろ手で縛られているのと同様の状態だった。

「ああ、つくうう……っ」

（い、痛い……お尻、ヒリヒリして……）

きつと赤くなっていることだろう。只でさえ弄られて敏感になりつつある部位に、鋭い刺激を与えてくるのだ。痛みはより強く感じてしまう。

「いいねえ。ケツがあつたかくなってるぜ？」

ムニツ、ムニツ、と男子の指が深く食いこんでくる。熱を持った尻皮の表面に。

「ああ、いや……痛いから、触らないで……」

少年たちの手は優しいというほどではないが、痛くはない。むしろ撫でるような採みこみ具合が、痛んだ感覚には不思議と安堵をもたらしてくれる。

はあ、はあ、と息が乱れる。掴まれた上に尻叩きまでされて、どんどん惨めな気分になつてしまふ。

痛みが恐怖を生み、恐怖が身体を強張らせる。そして身体は、痛みを避けたいがために、別の感情を揺り起こしていく。

(あああ、か、身体が……熱く……)

テクニツクも何もない乱暴な愛撫に、しかし女肉は柔らかくなつていく。胸が、尻が、太腿が、モミモミと撫でこまれてじつくりと解ほぐされていく。

「ふふ。よし、そろそろ僕も楽しませてもらおうかな」

これまでずっと椅子に座していた御岳が、ニヤニヤと笑いながら立ち上がつて近づいてくる。すぐ前に全裸の女——失踪した女教師の一人——をはべらせて。

女は必死の様子で彼の股間にむしゃぶりついている。歩く速度にオタオタと合わせながら、それが自分の使命だというように。

「はあ、はあ、くつ。アナタが、この学園をこんな風にしたの？」

「まあ、近いかな。でも、承諾してくれたのは学園だけだね」

赤面した顔で睨みつけると、御岳は薄笑いで答えた。そこには罪の意識など微塵もない。まさに支配者の様相。現実の歪みにつけこみ利権を貪ることを当然と考える、自己中心的な傲慢さ。

「さて、大きいらしいその乳房を味わわせてもらおうかな？」

御岳の両掌が伸ばされる。スツと首筋のブラの肩紐に手をかけると、まだ残っているスツの襟と一緒に――

グイグイッ！　ぷるっ、ぷるるるん！　と、白い肩と豊かな乳房を丸裸にしてしまう。

「ああんん!!　そ、そんな……!!」

スツもブラも肘まで下げられ、上半身が完全に露出される。見事な柔乳が白日の下に晒される。

「へえええ。本当に立派な胸だ。見たところ、Fカップくらいですわね？」

完全に見られ、サイズまで言い当てられ、羞恥に目を瞑ってしまふ早苗。一時開放された生乳房に生徒の視線が絡みつくのが分かる。

それは、きめ細やかな白肌と鮮やかな桃色に飾られた、実に整った丸みの肉塊であった。水風船のような膨らみに瑞々しい張り具合。綺麗な円球は型崩れもなく、しっかりと胸筋に支えられて垂れもない。

軽い尖りはやや上向きで、健康的なバストであることを主張してやまない。そしてプツクリと突き出した乳首は、まさに哺乳瓶のような丸さと大きさだった。

「すげえ。まるでモデルみたいだぜ」

「ホント、むしろぶりつきたくなっちゃう」

（は、恥ずかしいっ！ 散々触られて……見られてしまつて……！）

早苗とて大人の女。自分の身体がどう見られるのかくらいは知っている。痴漢にだつてあつたことがある。

が、触られることはあつても、こうまで揉まれて直に見られることなど経験がなかった。初めての痴態に途方もない恥と悔しさを覚えて堪らない。

「いいバストだ。じゃ、楽しんでませてもらおうかな」

御岳の両掌が再び伸ばされる。白い生乳房を五指が支えると、下から深々と埋めこまれてしまう。

ムニユリッ。むにつ、むにつ、ぎゅうううつつ。

「あううつつ!! や、やめ……触らないでえ……!」

散々弄ばれた二つの丸みが、搾るように揉みしだかれる。尖った先端を避け、左右から握るように。

柔らかい脂肪がなまめかしく形を変える。甘い膨らみはたつぷりところねられて、今にも

「ああっ、ああんつつ。だ、ダメえ……こんなあ、こんなオチンチン……凄くて……！」  
「そうでしょう？ コレで何人もの女を狂わせてきたんだ。アナタも虜にしてあげますよ、ククッ」

早苗の反応に満足したらしく、さらに挿入を強める御岳。今度は正面から叩きつけるようにピストンする。

じゅぶううっ!! じゅん! じゅぶん! じゅむんじゅむん!!

「ひあああああつつ!!? ふかつ、深いいいいいつつつ!!!」

裏筋を滑らせるようにして突き入ってくる真珠ペニス。膣壁の一点を激しくこすられ、燃えるような悦感が駆け上がる。角度を変えた亀頭がより深い部位を圧震させて、胎の奥底を熱い性欲に感染させてしまう。

「ああっダメ! らめえ! 奥、オクっ、気持ちいいいいつつつ!!!」

(こんなああ、こんなコト、教えられちゃってえ……!)

心とは裏腹に、成熟した肢体は雄の硬さを喜んでしまっている。禁欲から開放された本能が、熱く、激しく燃え上がる。自慰とは比べものにならない性感に、膣が締まるのを止められない。

「くあああんつつ!! い、イボお……こすれて……い、いいつつつ!!」

「呆れた娘だ。いくら御岳様の一物とはいえ、これでは教師失格だな」

冷徹な教師の声色で理事長、崩堂院。尻に感じる彼の息子は、さすがにズボンの中でそり立っていた。彼女の体重を受けても曲がりもしないほど、堅く、逞しく。

「はは、崩堂院もやりたくなつたのかい？ 珍しいね」

「いえ。これは教育者としての義務感です。淫乱ではしたない娘には、男の制裁が必要ですから」

御岳に訊ねられ、慇懃に応じる理事長。これを教育と語るのだから、彼も相当病んでいるとしか思えない。

すると御岳はニヤリと笑って、いいですよ、と続けた。周りの取り巻きに目配せして、理事長のズボンを下げさせる。

「じゃあ、たつぷりと教育してあげてください。アナタの轟直でね」

「恐れ入ります」

「ひっ!？」

ビビン！ と跳ね上がる、尻のすぐ下の雄勃起。肉の熱を感じさせるソレは、やはり見事な硬さだった。

見えない恐怖に慄く早苗。愛液にテラつく尻の間を、張りのある感触がツツ……と伝う。ソレはやがて、ヒクつく肛門を擦り越え、先客のいる濡れ亀裂にピタリと焦点を合わし

「んああっ!! ヒイ!!」

ムチュリ。ミチミチムニムニ……!!

「あぎっ!? あヒイイ!!!」

イボの間を縫うように——トロトロの秘口を裂くように——硬い熱が、強引に割って入ってくる。信じ難いことに!

ムニイ……ムチムチズグズグウウ!!

「あぎイイイイ!!! ヒああああああああつっつ!!!」

（そんなあ!! 無理、ムリよおおおおおつ!!!）

何と——すでにペニスの入ったヴァギナに、もう一本、別のペニスが押しこまれたのだ。これには早苗も堪らず悶絶するしかない。

「ぎヒイイイイイイ!!! きつ、キツううううああああつっ!!!」

壊れるような衝撃に肢体をのたうたせる巨乳美女。新たなペニスはこれまた太長く、サイズだけなら御岳を超えている。真珠こそないが、雄々しさと反りの強さは圧倒的で、尾てい骨を砕きかねないほどの淫衝撃だった。

「おおっ、凄いつ! 二つ入ったぞ……つ!!」

「うむう、何と淫乱な……! やはり指導が必要だな!」

揃って穴を埋めきった生徒と理事長は、顔をしかめて腰を振りたてる。抉りこむように

激しく、硬く。

ズグウウ!!　じゅむっ!　じゅむっ!　ムチツ、ミチイイツ!!

「あぎいいいらめええ!!　らめっ、すごすぎイイイイツつっ!!!」

恐ろしいほど胎内で暴れまわる二本勃起。手前側では真珠のイボが襞をグチュグチュにこね回し、後ろ側では硬すぎるエラがゴリゴリと削り掘ってくる。そして逞しい二つは、異常なほど膣洞を押し広げてくるのだ。

（お、おおおおおおお……!!　こんなああ……燃えて……燃え尽きちゃううう!!）

みっちり埋まったペニスたちは、余すところなく性感帯をこすり上げてくる。感じやすい場所もそうでない場所も、まとめて全部、徹底的に。

おかげで痺れるような媚感は、焼けつくような激熱性感に取って代わられる。凄まじい摩擦に腰全体が痙攣し、背骨が狂ったように跳ね回る。

「っそろそらっ!　アナタはこうやって僕らに楽しまれるための存在なんですよ!　ガンガンにぶちこまれてね!!」

「そうです。この少子化は、君のような雌が解決しなければならぬ。こうして子種を植えてつけられながら!」

壮年と少年のコンビネーションは見事なものだった。まるで餅つきのように、交互に入り分けながら乙女腰を跳ね上げてくる。おかげで美女の半裸体は、宙で悶えつばなし

だった。

「あぎいっ!! あひいっ!! マ○コ、マ○コ飛ぶうう!! 壊れひやううううっ!!」  
 壊れた人形のように舞い狂う女捜査官。Fカップ豊乳が上下に踊り乳首から汗を散らす。  
 細腰はくねって快楽を現し、真っ赤な尻たぶは濡れに濡れて、波打つたびに蜜を滴らせて  
 いた。

(ら、らめええ……あたま、おかしくうう……)

灼熱の淫感に苛まれて、意識が朦朧としてくる。凄まじい激痛だったはずだが、身体と  
 脳がそれを忘れたように雄肉を味わうのが止められない。乳房を握られ尻肉を叩かれても、  
 何もかもが——快感に思えてならない。

「あひああああ、あひいっ!! イクうう、イギますううう……マ○コお、ナカあああ……  
 …!!」

性感までもが白んでくる。わけが分からなくなつて——何も考えられない。ただ——イ  
 キたい。雄熱で燃やされたい!

「よおおし……そろそろぶちまけてやる。アナタの胎をいっばいにしてあげますよ!」

御岳もまた、汗を垂らして悦に入っているようだ。むき出しの下半身をバネのように使  
 つて斜め上に突き上げてくる。しかも両手を早苗の肩に置き、勢いを逃がさぬように使  
 ずじゅううっ!! じゅぼっじゅぼっじゅぼっじゅぼん!!!



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**